

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13546

研究課題名(和文) イスラーム思想のなかの「子ども」- ローカルな実践と思想にみる発達観の解明

研究課題名(英文) 'Childhood' in Islamic Thought: The View of Human Development in Local Practice and Thought

研究代表者

服部 美奈 (Hattori, Mina)

名古屋大学・教育発達科学研究科・教授

研究者番号：30298442

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：期間全体の研究成果は以下の4点である。第一に、イスラーム教義のなかのバリフ(アラビア語ではブルーフ)という概念が、子どもの発達段階、特に子どもと成人を隔てる概念として重要であることが再確認された。第二に、各地域で行われる通過儀礼は、実施される時期や意味づけにおいて異なっている。第三に、各地域に共通して、思春期(第二次性徴を迎えてから結婚に至るまでの時期)の子どもへの対応は、イスラームの教義と子どもが当該社会で置かれた社会状況との間にアンビバレントな状況が生まれている。第四に、思春期の扱いにより、教育や結婚、交際範囲、服装に異なる解釈が生まれ、教義とのズレもみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

イスラームは、独自の人間観を有する一つの思想体系であり、独自の発達観・教育観を有する。ここでいう発達観・教育観は固定的なものではなく、ローカルな文脈のなかで解釈・実践され、生成される動的なものである。研究は、イスラーム思想のなかの「子ども」に焦点をあてることを通して、イスラームにおける発達観・教育観を明らかにした点に学術的意義があり、日本におけるイスラーム教育思想研究の不在に対し、新たな視点を提供するものである。同時に本研究は教育という観点からイスラーム理解に寄与する点で社会的意義を有する。

研究成果の概要(英文)：This research results are the following four points. First, it was reconfirmed that the concept of Baligh (Bulugh in Arabic) in Islamic teachings is important as a concept relating to human development which separates children and adults. Secondly, the passage rituals performed in each region differ in the timing and meaning of implementation. Third, in common with each region, the response to adolescence depends on the Islamic teachings and the social conditions in which the children are placed in the society. There is an ambivalent situation between them. Fourth, the treatment of adolescence gave rise to different interpretations of education, marriage, social communication, and clothes, and there were some discrepancies with religious teachings.

研究分野：比較教育学

キーワード：イスラーム教育 イスラームの子ども観 通過儀礼

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

イスラームは、独自の人間観を有する一つの思想体系である。そして、教育学的な観点からみると、独自の発達観・教育観をもつ思想体系でもある。イスラーム学の歴史は長く、これまで国内外でイスラームの人間観に関する研究がなされてきた[井筒 1957,1958,1964 他; Esposito 1996,2001,2009 他]。また、イスラームの発達観・教育観に関しては、イスラーム文化圏の宗教系大学や教員養成系のイスラーム教育学部において、宗教学をベースに教育をめぐる教義の解釈が研究・教授されている[Arifin 1991; Ahmad Tafsir 1992 他]。しかし、日本の教育学研究においてイスラーム教育思想研究は、管見の限り皆無である。加えて、日本のイスラーム研究においても、教育学的観点からの研究、とくに「子ども」に着目した研究やイスラームの発達観・教育観に着目した研究はほとんどない。

研究代表者は、上述したような研究の偏りや研究の不在に対し、イスラーム教育思想研究を発展させる必要性を感じてきた。イスラーム教育思想研究は、人間存在を問うことを主要なテーマとする教育学に対して、新鮮な視点を提供するものと考え、本研究を開始した。

### 2. 研究の目的

本研究は、イスラーム思想のなかの「子ども」に焦点をあてることを通して、イスラームにおける発達観・教育観を明らかにすることを目的とする。ここでいう発達観・教育観は固定的なものではなく、ローカルな文脈のなかで解釈・実践され、生成される動的なものである。研究では、これまでの主な対象地域であるインドネシアで得られた知見から「子ども」に関する分析枠組みを示し、イスラーム思想のなかの「子ども」に関する国際比較研究を行なった。

研究の具体的な進め方としては、①思想研究：イスラームのなかの「子ども」に関する思想研究、②現地調査：各地域の通過儀礼・宗教学習に関する現地調査、③理論化：①②の分析と国際比較をふまえた理論化を試みた。イスラームにおける発達観・教育観を示すことで、これまで西洋教育思想に偏りがちであった日本の教育思想研究に新たな視野を提供することも本研究の目的の一つとした。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究の方法

インドネシアでの調査から導き出されたイスラームにおける「子ども」の位置づけの構造を仮説モデルとして国際比較を行なうことにより、地域の多様性を反映した新たな視点の獲得を目指した。研究体制としては、各国の専門家である研究分担者に加え、現地に精通した海外研究協力者を加えることにより、研究の厳密性と発展性を担保した。研究では、①思想研究：イスラームのなかの「子ども」に関する思想研究、②現地調査：各地域の通過儀礼・宗教学習に関する現地調査、③理論化：①②の分析と国際比較をふまえた理論化を試みた。

#### (2) 研究の枠組み

インドネシアの調査からは、イスラームにおける「子ども」の発達段階と、子どもの成長ともなっている通過儀礼と宗教学習は以下の図のような構造になっている。本研究では、論点の明確化の観点から、以下を仮説モデルとし、国際比較を行なった。

#### ① バリフに至るまでの通過儀礼と宗教学習

第一に、コドモからオトナへの移行は、精通・初潮をむかえる「バリフ」という段階でおこる。「バリフ」はイスラーム法にしたがって罪と罰に責任をもつ「オトナ」への発達段階である。第二に、バリフに至るまでにすませるべき通過儀礼がある。誕生期に行なわれる新生児のムスリム化と誕生を祝う儀礼、そして男子の場合は精通を迎える前の10歳から12歳に割礼（性器の一部切除）が行なわれる。第三に、バリフに至るまでにすませるべき宗教学習がある。具体的には7歳になると、アラビア文字・クルアーン朗読の学習、礼拝や断食などムスリムとして行なうべき基本的な信仰行為を学び始め、バリフを迎える前の12歳（小学校6年生）頃にクルアーン修了式が行なわれ、モスクを中心とする宗教コミュニティにより基礎的な信仰行為を学んだことの承認を得る。

#### ② イスラーム教育思想のなかの発達観

イスラームの二大法源であるクルアーン（聖典）とハディース（預言者ムハンマドの言行録）には、イスラームの人間観・発達観にもとづき、教育に関する教えが数多くみられる。特に、誕生からバリフに至るまでの段階は、ムスリムの基本的な信仰行為を習得する重要な段階である。たとえば、宗教学習を開始する7歳という年齢はクルアーンで示されている。また、子どもは信仰するフィトラ（先天的な性向）をもって生まれると考えられており、それを導く両親の責任が明示されている。

#### ③ 地域文化との融合—国際比較の必要性

一方、イスラームにおける通過儀礼と地域文化との融合あるいは地域における独自の展開もみられる。割礼はムスリムの義務とされ多くのイスラーム文化圏で行なわれるが、実施年齢はクルアーンとハディースには示されていない。インドネシアの場合は10歳～12歳だが、他の地域

では異なる意味づけがされ、異なる年齢で実施される可能性がある。また宗教学習についてもアラビア語圏と非アラビア語圏の違いが予想される。これらは地域文化と融合したことによる多様性であり、イスラームの発達観の普遍性と地域の多様性を明らかにすることが必要である。

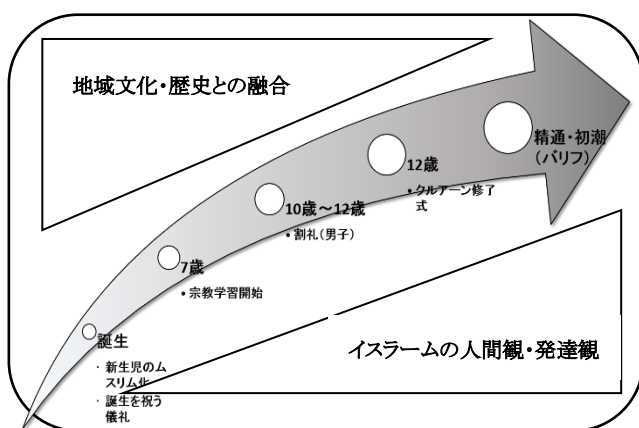


図 子どもから大人への移行過程

#### 4. 研究成果

##### (1) 2016年度研究実績の概要

2016年度は主に3つの研究を実施した。第一に、インドネシアで得られた知見を精緻化し、仮説モデルの再検討を行った。具体的には、コドモからオトナへの移行段階（バリフ概念）、オトナに至るまでの通過儀礼（新生児誕生の儀礼、アキカ、割礼、クルアーン修了式など）、オトナに至るまでに行う宗教学習（アラビア文字・クルアーン朗誦学習、礼拝、断食）について思想的側面と実践的側面の両面から検討を行った。第二に、イスラームのなかの「子ども」に関する思想研究に関して、各地域を担当する分担者が、適宜、海外研究協力者との協働により、担当地域のイスラーム教育思想に関する文献を収集・分析した。その際、「子ども」に関連する思想を抽出し、教育観を考察した。第三に、通過儀礼・宗教学習に関する現地調査を実施した。年度当初はトルコで調査を行う予定であったが、トルコの政情を鑑み、2016年度はインドネシアで調査を実施した。

インドネシア調査では、ジャカルタとボゴールでトルコ系ムスリムが運営するインターナショナルスクールと宗教学校の教員、生徒及び保護者を対象にした。調査は三つの段階に分けて行った。第一の段階については、現地（トルコ）のイスラーム解釈にもとづく伝統的な子ども観を理解するため、現地文化に詳しい専門家とのワークショップを開催した。教育機関への視察を行った第二の段階では、第一の段階で開催したワークショップで得られた情報をもとに、伝統的な宗教思想がインターナショナルスクールなどの現代的な教育機関においていかに適用されているかを考察した。第三の段階では、調査対象学校に通う児童の保護者宅を訪問し、保護者や児童とのインタビューを通して、イスラーム思想における子ども観とローカルな実践の違いについて情報収集を行った。

##### (2) 2017年度研究実績の概要

2017年度は主に2つの研究を実施した。第一に、イスラームのなかの「子ども」に関する思想研究に関しては、海外研究協力者との協働により、各地域のイスラーム教育思想に関する文献を収集・分析した。第二に、各地域の「子ども」観と、子どもの発達に応じて行われる通過儀礼・宗教学習に関する現地調査を実施した。2017年度はイランとトルコで調査を行う予定であったが、トルコに関しては昨年度と同様、現地での調査が困難であると判断し、イギリスにおけるトルコ移民家族を対象に現地調査を実施した。イランは予定通り実施した。

2018年2月に実施したイラン調査では文部省を訪問し、文献調査を行った。またテヘラン教育委員会を通して、市内のアンヂシェ小学校（男女共学校）とレジャー小学校（男子校）を訪問し、各学年の授業実践を観察した。さらに、イラン文部省の調査官と管理職に対し、イスラーム思想における「子ども」の位置づけ、「発達」「教育」に関する意見交換を実施した。これらの調査を通して、イランにおける子ども観・発達観とともに同国におけるローカルな実践と解釈が明らかになった。加えて、同年3月に実施した国内調査では、関係機関で資料収集を行うとともに、特にシーア派における「発達」「教育」思想とローカルな実践を国際比較の観点から考察するため、東京のイラン人学校の校長他と面談し、学習過程にみられる子ども観と教育観、さらに教科書（高等学校の4冊—宗教と生活—）に関する聞き取りを行った。

2018年3月に実施したイギリス調査ではバーミンガム中央モスク、Golden Hillock School、Jamatia Islamic Center、Millbrook Primary School (Swindon City)、週末に開催されるトルコ系児童向けの宗教文化学級を訪問し、関係者への聞き取りを行った。調査では、国立高校における宗教教育、モスクにおける宗教教育、非ムスリム社会におけるムスリムと非ムスリムとの調

和などに関して多くの情報を得た。同調査ではムスリムが少数派であるイギリス社会を対象としたが、ムスリム住民が多いバーミンガム市とその周辺地域を対象にした本調査では、イスラームの子ども観を視野に入れつつ、宗教教育について調査を行った。イギリスの公立中等教育機関においてイスラーム教育は、キリスト教、ユダヤ教、仏教、シーク教、ヒンドゥ教とならんで義務化されている。このことは在英ムスリムにとっても望まれる方向性である。また、多様な文化と信仰を背景にもつイギリス社会における統合政策である「英国国民の価値観 (British Value)」にも一致した実践であることから、イギリスの非ムスリムにも歓迎されてきた。しかし近年、双方からは不安の声が上がっている。ムスリム側は、宗教教育に導入されている「批判的思考 (critical thinking)」によって宗教への批判的な見方を持つ青年が増加することへの不安と、過激派による影響力の拡張を問題視しており、学校での宗教教育が充分ではないとして、モスクやマドラサ (イスラーム学校) においてイスラーム教育を推進している。一方、非ムスリム側は、過激派の拡張を防止するために穏健的な宗教教育を重視しつつも、ムスリムによるイスラーム教育の教授に疑問を持つようになってきている。その背景には、バーミンガムで発生したムスリムの管理者による非ムスリムの教育者の学校からの追放と、その代替としてのムスリム教育者の採用疑惑、いわゆる「木馬学校 (Trojan horse school)」事件が影響しているとされている。上述の課題を抱えるイギリスでは、いかに在英ムスリムのニーズに応じつつ、非ムスリムの疑念を払拭できるかについて議論が続いている。イギリスにおけるトルコ系移民の教育問題は、ムスリム・マイノリティを抱える多くの非イスラーム社会にとっても重要な課題であり、今後継続して研究する意義が充分にある。同調査では、トルコ系移民の家族が非ムスリム社会の環境のなかで、いかにイスラームの子ども観を保持あるいは変容させるかについて新たな知見が得られた。

### (3) 2018 年度研究実績の概要

2018 年度は主に 2 つの研究を実施した。第一に、前年度同様、イスラームのなかの「子ども」に関する思想研究に関して、海外研究協力者との協働により、各地域のイスラーム教育思想に関する文献を収集・分析した。第二に、各地域の「子ども」観と、子どもの発達に応じて行われる通過儀礼・宗教学習に関する現地調査を実施した。2018 年度はマレーシアで調査を実施するとともに、インドネシアから 2 名の研究者を招聘して国際ワークショップを開催した。この際、イランからも研究者を招聘する予定であったが、ビザ取得の関係で来日が困難となった。

2019 年 1 月に実施したマレーシア現地調査では、インド人学校およびオランアスリ (原住民) 学校を訪問し、①インド系ムスリム児童と保護者に対しては、イスラームの子ども観・発達観、そして子どもの発達に応じて行われる通過儀礼や宗教教育に関するインタビュー調査、②オランアスリ (先住民) に関しては、イスラームに改宗した児童と保護者を対象に子育て・教育に関するインタビュー調査を実施した。また、スルタン・イドリス教育大学およびマレーシア国際イスラーム大学において、イスラームと子育てのローカルな実践について同大学のムスリム研究者らと情報交換・意見交換を行った。同時に、近年のイスラーム教育改革について教育省で資料収集を行った。

2019 年 2 月に実施した国際ワークショップ「Childhood in Islamic Thought: Diversity and Similarity in the Local Context」では、インドネシアから 2 名の研究者を招聘し、イスラームと地域文化の融合がみられるジャワを事例に、ローカルなコンテキストで実践される子どもの発達に関わる通過儀礼とジャワ独特の子ども観に関する議論を行った。

### (4) 2019 年度研究実績の概要

2019 年度は前年度までに実施した研究を最終報告書としてまとめることを主な活動とした。具体的には、研究期間を通じて行った文献によるイスラーム教育思想研究と各国での現地調査の成果、さらに 2018 年度に実施した国際ワークショップをもとに、イスラーム思想のなかの「子ども」に関して思想と実践の両面から研究を総括した。前者については、胎児や子どもの位置づけ、イスラーム教育思想に関する論考をトルコとイランを中心にまとめた。後者については、子どもの発達に応じて行われる通過儀礼・宗教学習のローカルな実践に関する論考を中心にまとめた。

### (5) 期間全体の研究成果

期間全体の研究成果は以下の 4 点である。第一に、イスラーム教義のなかのバリフ (アラビア語ではグループ) という概念が、子どもの発達段階、特に子どもと成人を隔てる概念として重要であることが国際比較を通じて再確認された。第二に、子どもの成長に応じて各地域で行われる通過儀礼は、実施される時期や意味づけにおいて異なっている。たとえば、インドネシアにおいて男子の割礼はバリフに達する前の 10 歳～12 歳に施されるが、トルコやイランでは発達段階と割礼の時期は必ずしも結びつけられていない。またアキカという子どもの誕生を祝う儀礼もイスラームの教義では生後 7 日目とされるが、実施の時期は各地域によって異なっており、実施時期との関連で儀礼に対する意味付けにも違いがみられた。第三に、各地域に共通して、思春期 (第二次性徴を迎えてから結婚に至るまでの時期) の子どもへの対応については、イスラームの教義と子どもが当該社会で置かれた状況 (就学期であることなど) との間にアンビバレントな状況が生まれていた。第四に、子どもの発達段階上、思春期をどのように扱うかにより、子どもの教育や結婚、日々の交際範囲、服装に異なる解釈が生まれ、時には教義とのズレを伴いつつ実践され

ていた。

(6) 研究成果の学術的意義や社会的意義

イスラームは、独自の人間観を有する一つの思想体系であり、独自の発達観・教育観を有する。ここでいう発達観・教育観は固定的なものではなく、ローカルな文脈のなかで解釈・実践され、生成される動的なものである。研究は、イスラーム思想のなかの「子ども」に焦点をあてることを通して、イスラームにおける発達観・教育観を明らかにした点に学術的意義があり、日本におけるイスラーム教育思想研究の不在に対し、新たな視点を提供するものである。同時に本研究は教育という観点からイスラーム理解に寄与する点で社会的意義を有する。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 子島進・服部美奈	4. 巻 2018年53号
2. 論文標題 在日ムスリムによる地域交流 - モスクでの聞き取り調査から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『アジア文化研究所研究年報』	6. 最初と最後の頁 54(185)-66(173)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 服部美奈・西野節男	4. 巻 第64巻第1号
2. 論文標題 トルコにおける宗教指導者養成 - 政府による取り組みと「ヒズメット（奉仕）運動」の展開	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）	6. 最初と最後の頁 145,168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 服部美奈	4. 巻 Vol.207
2. 論文標題 インドネシアの高等教育戦略	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 カレッジマネジメント	6. 最初と最後の頁 52,54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Danismaz Idiris	4. 巻 Vol.11
2. 論文標題 Ibn Arabi Thoughts in the Practice of Ordinary Muslims: From the "Ethical Interpretation" and "Practical Application" Perspective of Ismail Hakki Bursevi	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies	6. 最初と最後の頁 85,94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 服部美奈・神内陽子	4. 巻 66(2)
2. 論文標題 「インドネシアの法学教育と法曹養成 - 一般系総合大学とイスラーム大学の比較の観点から - 」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』	6. 最初と最後の頁 173,198
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 服部美奈
2. 発表標題 インドネシア 国際水準校：国民教育における卓越性と教育の平等
3. 学会等名 日本比較教育学会第54回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 服部美奈
2. 発表標題 20世紀前半の蘭領東インド・イスラーム社会における「近代家族」と子ども観 - 雑誌『アイシャの声(Soeara Aisjijah)』（1926-1941）に焦点をあてて
3. 学会等名 比較家族史学会第61回春季研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西野節男・服部美奈
2. 発表標題 マレー世界におけるコロニアリズムとイスラーム教育 - 植民地官僚の認識と経験から -
3. 学会等名 日本比較教育学会第53回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 服部美奈
2. 発表標題 インドネシアの国際水準学校の事例」ラウンドテーブルアジアにおける自律的公設学校と国民教育の関係性 - 国際比較の観点から -
3. 学会等名 日本教育学会第76回大会ラウンドテーブル
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 鈴木康郎・服部美奈
2. 発表標題 ASEAN市民の教育 - タイとインドネシアの事例から
3. 学会等名 第1回東南アジア教育研究フォーラム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hattori Mina
2. 発表標題 " Education in Japan 's Remote Islands and Remote Areas as New Frontier "
3. 学会等名 International Seminar: Strengthening of Maritime Culture and Historical Values in the Era of Global Competition (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Lander, B. W., Sarkar Arani, M. R., Shibata, Y., Sakamoto, M., Zanaton, I., and Tan, S.
2. 発表標題 What can We Learn from the Way Mistakes are perceived in the Classroom? A Comparative Lesson Study.
3. 学会等名 11th World Association of Lesson Studies International Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年



1. 発表者名 Danismaz Idiris
2. 発表標題 "The Notion of Conscience in Islam: Focusing on "Vicdan" in Hak Dini Kur'an Dili by Elmalili Muhammed Hamdi Yazir (d. 1942)"
3. 学会等名 KIAS-IMS Seventh Joint Seminar on "Exploring Culture and Politics in the Mediterranean World" (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Danismaz Idiris
2. 発表標題 イスラーム神秘主義思想の「倫理的合理化」 プルセヴィー（1728年没）の存在思想とクルアーン解釈に着目して
3. 学会等名 NIHUプログラム「現代中東地域研究」京都大学拠点主催「3班合同研究会」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 服部美奈
2. 発表標題 「インドネシアにおける宗教の位置づけと宗教教育について」
3. 学会等名 「大学と宗教」研究会（第3期）第5回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 服部美奈・神内陽子
2. 発表標題 「インドネシアの法学教育と法曹養成 - 一般系総合大学とイスラーム大学の比較の観点から」
3. 学会等名 日本比較教育学会第55回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 服部美奈（比較家族史学会監修、小山静子・児玉亮子編著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本経済評論社	5. 総ページ数 294
3. 書名 『子どもと教育 - 近代家族というアリーナ（家族研究の最前線）』	

1. 著者名 服部美奈（田中亨胤・越後哲治・中島千恵編著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 あいり出版	5. 総ページ数 222
3. 書名 『改訂 未来に生きる教育学 - 変動期の教育の構築』	

1. 著者名 服部美奈（近藤孝弘・中矢礼美・西野節男編著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 368
3. 書名 『地域研究 多様性の教育学へ』（リーディングス 比較教育学）	

1. 著者名 近田政博・乾美紀・服部美奈	4. 発行年 2017年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 183, 40-64
3. 書名 山内乾史他編著『現代アジアの教育計画 補巻』	

1. 著者名 平田利文編著	4. 発行年 2017年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 336
3. 書名 『アセアン共同体の市民性教育』	

1. 著者名 服部美奈・エル・アマング・デ・ユリエ・アッラファジュル・スルヤディムルヤ	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ベネッセ教育総合研究所Child Research Net (CRN)	5. 総ページ数 45
3. 書名 『ひとめでわかる世界の幼児教育・保育 - 各国・地域のECECのマトリクス』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西野 節男 (Nishino Setsuo)  (10172678)	名古屋大学・教育発達科学研究科・教授  (13901)	
研究分担者	サルカルアラニ モハメドレザ (Sarkar Arani Mohamed Reza)  (30535696)	名古屋大学・教育発達科学研究科・教授  (13901)	
研究分担者	DANISMAZ Idiris (Danismaz Idiris)  (70631919)	大学共同利用機関法人 人間文化研究機構本部・総合人間文化研究推進センター・研究員  (82651)	